

国語 (教育学部)

(令和七年度)【前期日程】

問題冊子 一～十四ページ 答案用紙 三枚

注意事項

- 一 試験開始の合図があるまでこの冊子を開いてはいけない。
- 二 枚数の不足や、印刷に不鮮明なところがあれば申し出ること。
- 三 解答は必ず答案用紙の指定された箇所記入すること。
- 四 受験番号は、答案用紙一枚ごとに所定の欄二箇所必ず記入すること。記入を忘れたとき、あるいは誤った番号を記入したときは失格となることがある。
- 五 試験が終了したら、答案用紙を上から(その一)、(その二)、(その三)の順番に重ねて机の上に置くこと。
- 六 退室するときは、問題冊子を持ち帰ること。

— 1 —
次の文章を読み、後の設問に答えなさい。

グローバルな消費社会が生み出す「商品」の同一性、たとえば同じ音楽を聴いているとか同じブランドの服を着ているとかの端的な事実こそが、政治的分断を越え、新たな連帯の基礎になるのではないか。ひとはものを考えすぎるとバラバラになる。とくに政治は人間集団を必然的に友と敵に分ける。なにも考えず、消費財に囲まれてプールにぶかぶかと浮かんでいるときのほうが、論文を書いたり選挙に行ったりするときよりもよほど寛容で、そして他者に対して「開かれている」のではないか。ぼくはその直観を、シンガポールのリゾートで得た。ここでは、みな、国籍も宗教も関係なく、当時世界的に流行し始めていた合成ジュエリーのサンダル、クロックスを^②ハいていたからである。

消費社会の幻想について考えること。それはぼくの考えでは、けっして現実逃避でもなければ、政治的思考の下位にある余技でもない。むしろ「人間とはなにか」を考えるうえでとても重要なことだ。

アリストテレスは、人間は政治的動物だと述べた。人間は確かに政治をする動物である。しかし政治しかしていないわけではない。政治に参加していないときもある。むしろそちらのほうが長いかもしれない。消費社会について考えるとは、その「政治をしていない部分」について考えることだ。アリストテレスの定義にしたがうならば、人間の動物的な部分と呼んでもよい。

人間は人間である。だから政治をする。しかし同時に動物でもある。だから政治から離れるときもある。人間社会はその両輪で成立している。

人間と動物の対立について考えてみよう。哲学は伝統的に人間と動物のあいだにはつきりと線を引いてきた。少なくとも西洋ではそうだ。

そして人間性を動物性よりも上位に置いてきた。人間は動物と異なり、理性や言語のような固有の精神的な能力(人間性)をもつからこそ、文明や社会を生み出したのだと考えられてきた。アリストテレスにおいては、この固有の能力こそが「政治」、

すなわちボリスをつくる能力だった。その固有の能力を失えば、人間もまた動物と同じ愚かで無秩序な存在に墮落する。たとえば欲望に狂うと、人間は理性を失い獣になる。

人間は精神があるので善で賢い存在で、動物は精神がないので悪で愚かな存在である。これはいつけんもつともらしい対立ではある。けれども少し考えればわかるように、本当はたいして根拠がない。

人間はそもそも動物である。だから人間と動物に明確な線は引けるわけがない。人間のなかには人間性と動物性がともに宿っており、両者は分かちがたく絡み合っている。たとえばあなたがだれかを愛したとして、そこで精神的な愛と肉体的な愛を区別することになんの意味があるだろう。

加えて、かりにそのような線が引けたとしても、そこで人間が動物より道徳的に優位だという主張にはほとんど根拠がない。動物は目のまえの敵を殺すだけだが、人間は何百万人も平気で殺す。それはまさに人間の精神が可能にする残酷さである。だからヨーロッパにもルソーのように、人間は文明をもったからこそ不幸になった、動物と同じく自然のまま生きていたほうが幸せだったと主張する哲学者が現れた。ルソーは一八世紀の人物だが、人間の残酷さはその後の歴史でさらに明確になっている。

いずれにせよ、人間性を動物性から区別し、人間には道徳的に特別な能力が備わっているとする伝統的な考えは、とても脆弱である。人間は自然の一部であり、たまたま脳が進化した動物にすぎない。人間と動物は連続しているし、動物と植物も連続しているし、おそらくは生命と非生命も連続している。その連鎖の一部だけを人間の領域として区別することはできない。

人間は動物にすぎない。それゆえいまでは、ピーター・シンガーのように、人権の適用範囲を動物にまで拡大すべきだと主張する哲学者も現れている。霊長類やイルカなど、大脳が発達した哺乳類に部分的な人権を付与すべきだという。これはいつけん非常識なようにみえるが、じつに論理的な主張である。人間と動物は連続している。動物も人間と同じように記憶をもつし、痛みを感じるし、仲間や家族を大切にする。だとすれば権利も分配されるべきだという主張が現れるのは、当然のこと

だ。

加えて最近では人工知能(機械)による挑戦がある。哲学者の多くは、言葉を話す能力こそ人間固有のもので、人間とそれ以外は言葉の有無で区別されると考えてきた。けれどもいまや機械も言葉を話す。それも、人間と区別がつかない、まるで自分で考えているかのような答えを返す。人間の固有性は、一方で動物との連続性により切り崩され、他方では機械の出現で脅かされている。

人間は自然の一部にすぎない。だから人間だけがもつ固有の能力は存在しない。人間の能力は動物も部分的にもっているし、機械でも再現できる。これはいまや、理系文系関係なく、人間について考えるすべての学問が共有すべき出発点だと思われる。

だとすれば、近い将来、ぼくたちは人間について考えるのをやめることになるのだろうか。いま「先進的」な知識人やアーティストの意見はそちらのほうに傾いているようだ。一九九〇年代あたりから、主人公が人間ではなく、かといって異星人でもなく、チンパンジーやイルカや人工知能に設定されている小説が現れるようになった。二〇〇五年にはレイ・カーツワイルの『シンギュラリティは近い』が刊行され、ポストヒューマンやトランスヒューマンといった言葉が流行語となった。かつてフーコーは『言葉と物』で、人間という概念は波打ち際の砂のうえに描かれた顔のように消えていくだろうと記したが、その予言はいま文字どおり現実になりつつあるようにみえる。

人間は消えつつある。人間ができることはすべて動物や機械もできる。ぼくたちはみながそう考えるようになり始めた時代を生きている。

にもかかわらず、^Aぼくは「人間」は消えないと考える。これは矛盾して聞こえるかもしれないが、ぼくはそう考える。

繰り返すが、ぼくは人間という種に固有の能力があるとは考えていない。人間の文化や社会、道徳や芸術に特別の優位性があるとも考えていない。人間ができることはすべて動物や機械もできるし、いま人間にしかできないことも近い将来すべて機械で再現できるようになるだろう。ぼくはその未来の到来を疑っていない。

しかし、そのうえで、ぼくはあらためて「人間」は消えないと訴える。理由は単純である。「人間」という言葉は、それが名指す実体とはべつに、ぼくたちが人間であるかぎり生み出し続けてしまう、ある種の幻想を意味しているからだ。その幻想は事実とは独立して機能する。

現実には人間に固有性などない。にもかかわらず、ぼくたちは、「人間」に固有ななにかがあるという幻想を手放すことができない。

たとえ将来、チンパンジーやイルカや人工知能に人権を認めるときが来たとしても、そのときぼくたちは「チンパンジーやイルカや人工知能たちもじつは人間だった」と思うだけで、人間の固有性が消え去ったとは考えないだろう。なぜならば、そのように考えなければ、そもそも人権を付与すること自体ができないからである。人権とは人間の権利のことなのだから、人間が消えてしまつたら人権も消え去る。つまりは、そこで生じるのは人間の消滅ではない。むしろ人間という幻想の拡張のほずなのだ。人間の概念はそのようにして生き残る。

幻想は、その本来の定義が失効したとしても、「じつは」の論理によつて自在に姿を変えて生き残る。人間はそんな無数の幻想に囲まれて生きており、「人間」もそのひとつである。科学的対象としての人間の固有性は消える。しかし幻想としての「人間」の固有性は消えない。これがぼくの考えである。

したがつてぼくは、たとえば人間知性の脳生理学的なメカニズムが解明されることで人文学が変わるといった見立てを、ひとつのところあまり信じていない。社会科学は変わるかもしれないが、人文学はおそらく影響を受けない。哲学者は、たとえば二〇〇〇年後の世界でも、あいかわらず過去の文献をひっくり返し、真や善や美のような定義不可能な概念についてああこうだと無駄なおしゃべりを続けているのではないかと思う。

これはつぎのようによいかわることもできる。理系と文系の距離はきわめて大きい。自然科学は事物を研究しているが、人文学は幻想を相手にしている。そして事物の解明と幻想の操作はほとんど関係がない。

それは、かりにだれかが失恋し落ち込んでいたとして、そのひとを慰めるため、愛は無意味だとか、あなたが愛した相手は

つまらない人物だったとか告げても意味がないのと同じことである。自然科学は愛のメカニズムを説明するかもしれない。しかしそれは人々を愛の悩みから解放しない。そして多くのひとが求めているのは、説明ではなくむしろ解放なのだ。

以上の議論が、冒頭の消費社会の話とどう関係してくるのだろうか。

鍵となるのは「幻想」である。人文学は幻想を扱う。消費社会は人々に幻想を与える。両者はともに幻想に関わっている。

幻想は幻想でしかないのだから、ふつうは幻想を生み出す現実の解明のほうが重視される。自然科学が自然の真理を解明するとはそういうことだし、リゾートの裏に回り、だれがプールを管理しているのかを調べるのも、いつてみれば同じ「現実の解明」である。ひとは、表より裏を見る方がユウエキで、幻想よりも現実を見るほうが本質的だと考える。だから、人文学より自然科学のほうが、また文化批評より政治学や経済学のほうが知的な営みだと考えられる。ぼくも基本的にはその見かたに同意する。

けれどもぼくは同時にべつのこととも考える。ぼくはさきほど、人間は人間だから政治をする、しかし動物だから政治から離れるときもある、社会はその両輪で成立していると記した。

政治は現実を扱う。友と敵を分け、だれがプールを管理すべきかを決める。

リゾートの客はそんなことは考えない。ただプールに浮かんでいる。現実は見ない。だからこそ冒頭で記したように他者に「寛容」にもなる。

とはいえそれは伝統的な哲学が考えるような人間的な寛容ではない。かつてアレクサンドル・コジエーヴは、人間的な生は環境と対立する、環境に調和して生きるのは動物だけだと記した。その意味ではリゾートの客は完全な動物である。だれがプールを掃除しているかなど、いつさい考えない。リゾートの寛容は動物的無関心の表れにすぎない。そこではいふならば、人間は動物へと墮落している。

しかしそれでは、ぼくたちはリゾートを閉鎖し、そんな墮落の場を社会から消し去るべきだろうか。⑥ 潔癖な左派はそう主張する。けれどもぼくはそうも考えない。リゾートは排除すべきでない。そもそも排除できない。

なぜならば、彼らリゾートの客は、ほかの場所ではブルを掃除しているかもしれないからである。彼らは政治家かもしれないし、経営者かもしれないし、科学者かもしれないし、労働者かもしれない。その職能においては裏方として社会を支えている。

かつてはブルに浮かぶ人間とブルを掃除する人間はべつの階級に属していた。古代ギリシアの民主政はドレイに支えられていた。シンガポールのリゾートも一〇〇年も遡れば白人ばかりが客で、現地人はボーイかメイドだっただろう。しかしいまは二一世紀だ。現代社会はそのような構造になっていない。リゾートを享受する客のほとんどは、ほかのどこかで他者に奉仕し、対価として金銭を獲得した人々だ。つまりフルタイムで動物なわけではない。

^Bここに現代社会の重要な特徴がある。ひとはときに人間になり、ときに動物になる。同じ人間があるときは裏方となり、あるときは客となる。それは裏返せば、現代社会では搾取る者と搾取される者を実体的に区別できないということの意味している。ある局面で搾取されているひとも、ほかの局面では搾取る側に回っているかもしれない。階級が分かれているわけではない。いま左派が力を失っているのは、そのような変化に対応できていないからだ。

現実と幻想の関係は入り組んでいる。幻想だけを排除することはできない。話がまた変わるようだが、ぼくはそのことを、ウクライナ戦争が始まってこの一年半で強く考えるようになった。

平和は幻想だ、戦争こそ現実だ、現実を見ろと多くのひとがいう。その主張は哲学的に正しい。

そもそも哲学者は戦争についてばかり語ってきた。ホップズは社会の本質は万人の万人への闘争だと主張し、クラウゼヴィッツは戦争は政治の延長だと指摘し、カール・シュミットは友と敵を分け、敵を殲滅する政治こそが人間の本質だと論じた。対して平和についての思考は驚くほど少ない。いまだカントの『永遠平和のために』が参照される。だから、平和を求める気持ちそのものも、現実逃避の『平和ボケ』でしかないように思われてしまう。

しかしぼくたちはなぜ戦争をするのだろうか。それは平和のためではないだろうか。そして平和とはそもそも、人々が戦争の可能性を思い煩わずにすむこと、つまり平和ボケの状態こそを意味するのではないだろうか。

C 戦争はこの点で自己矛盾を抱えている。戦争が存在するのは、戦争が消えるためなのだ。

これはいつけん言葉遊びのようだが、さきほどのリゾートの例にあてはめると具体的に理解できる。

リゾートの裏方はプールを清掃する。なぜ彼らはプールを清掃するのか。それは客が来るからである。なぜ客は来るのか。なにも考えない時間を過ごすためである。

だから、清掃自体が裏方の目的なわけではない。そして作業が客に意識されるのもよくない。裏方を意識すると客はなにかを考えてしまうからだ。それではリゾートの魅力は失われる。プールの清掃は絶対に必要だが、それはあくまでも客が来るからであり、そしてそのためには清掃は見えてはならないのである。

似たことが戦争と平和の関係についてもいえる。軍は必要だが、それはあくまでも平和が来るからであり、平和時に過剰に意識されてはならない。

むろん、平和時でも軍の存在は意識されるべきというのは正論ではある。防衛関係者や専門家はそう主張する。

けれども実際は、安全保障の詳細はどうせ広く共有できないし、またそもそも国民の大多数がつねに戦争の可能性を意識し続ける状態は平和ではない。平和はこの点で厄介な概念である。それは幻想でしかないのだが、しかしその幻想を否定するとなんのための戦争なのかかわからなくなり、戦争の必要性そのものが消滅してしまう。それは、リゾートの客も裏方の苦勞を知るべきだというのが正論だからといって、そんなキャンペーンを張つたらだれも客が来なくなり、なんのための裏方かわからなくなるのと同じことである。

ある種の現実^⑩は、現実の論理だけをカネツすると自壊することがある。だから幻想を必要とする。その幻想は、確かに幻想だけれども、しかし現実を生み出すという意味では現実的な存在でもある。平和について哲学者があまり語っていないのは、おそらくはその背後にこのような入り組んだ論理があるからだ。

(東浩紀「哲学とはなにか、あるいは客的―裏方的二重体について」による)

問一 波線部①②⑤⑦⑩のカタカナを漢字で、③④⑥⑧⑨の読みをひらがなで書きなさい。

問二 傍線部A「ぼくは「人間」は消えないと考える」とあるが、「人間」は消えない」とはどういうことか。五十字以内(句読点を含む)でわかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部B「ここに現代社会の重要な特徴がある」とあるが、「現代社会の重要な特徴」とはどのようなことか。八十字以内(句読点を含む)でわかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部C「戦争はこの点で自己矛盾を抱えている」とあるが、どういうことか。百二十字以内(句読点を含む)でわかりやすく説明しなさい。

下書用紙 (切り取らず、このまま使用すること。)

問二

問四

問三

二

次の文章を読み、後の設問に答えなさい。

建春門院注(1)と申ししは、世々を隔てたる古事ふることにて、御名みななどだにおほめく人も多からむかし。昔今、限りなかりし御契り、世のおほえにうち添へて、大方おほかたの御心掟おまきてなど、まことにたぐひ少なくやおはしましけむ。朝夕の御言種ごことばに、女はただ心から、ともかくもなるべき物なり。親の思ひ掟て、人のもてなすにもよらじ。我が心をつつしみて、身注(2)を思ひ腐さねば、おのづから身に過ぐる幸ひもある物ぞと仰せられし御いさめに、若き限り、まして親など立ち添ひたるは、おのおの心の中やいかなりけむ、もてなしたりし表面うはへばかりは、まことに「宮仕へ人」など言ひ思へるさまにこそ見えざりしか。注(3)

いかで人に声をも聞かれじ、ましてはづれさまにも、影をも見えむは、うたて恐ろしうのみ、つつみあへりしかば、さずが注(4)にさらぬ所には似ざりけりとも、のちにぞ思ひ合はする。

(健御前『たまきはる』による)

注(1) 建春門院……平滋子。後白河天皇の后。高倉天皇の母。

(2) 思ひ腐さねば……「思ひ腐す」は、「けなす。悪く思う」の意。

(3) 「宮仕へ人」など……「宮仕えをする女性は軽薄だ」といった類いの、当時の非難を指す。

(4) いかで人にく思ひ合はする……作者を含めた、建春門院に仕える女房たちの様子。

問一 傍線部①「御名などだにおほめく人も多からむかし」、傍線部②「さずがにさらぬ所には似ざりけり」を、それぞれ口語訳しなさい。

問二 二重傍線部A「御いさめ」の内容を、本文に即して説明しなさい。

三

次の文章を読み、後の設問に答えなさい。なお、設問の関係で、返り点と送り仮名を省いたところがある。

霍山、黄鼎、字玉耳、霍山諸生也。鼎革時起義、後降洪承疇。授霍山、黄鼎、字玉耳、霍山諸生也。鼎革時起義、後降洪承疇。授以總兵、使居江南。其妻独不降、擁衆数万、盤踞山中、与官兵抗、屢為其敗。総督馬国柱謂鼎、「独不能招汝妻使降乎。」鼎曰、「不能也。然其子在此、使往、或有济乎。」国柱遂使其子招之。鼎妻曰、「大廈將傾、非一木所能支。然志士不屈其志。吾必得総督来廬一面、約吾解衆、喻令薙髮。然吾仍居山中、以遂吾志。」其子覆命。国柱自来廬州。鼎妻率衆出見。貫甲鉄兜鍪、凜凜如偉丈夫。遂降、終不出山。

〔広陽雜記〕による

[注] 霍山、江南||地名。 黄鼎、洪承疇、馬国柱||人名。 諸生||科挙の受験資格を持つ者。

鼎革||易姓革命。ここでは明朝から清朝に王朝が交代すること。

起義||正義の兵を起こすこと。ここでは清朝に抵抗する軍を起こすこと。 総兵||武官。総督の下に置かれた。

盤踞||占拠する。 総督||省の長官。 濟||成功する。 大廈||高く大きな建物。ここでは国家をたとえる。

廬、廬州||妻が立てこもっている場所の地名。 一面||一度顔をあわせる。

薙髪||ここでは弁髪にし、清朝に恭順することを意味する。 覆命||命令に対して報告すること。 貫||着用する。

甲鉄||鉄のよろい。 兜鍪||かぶと。 凜凜||威厳があり、人に畏敬の気持ちをいだかせるさま。

偉丈夫||強くたくましい男。

問一 傍線部Aを書き下し文にしなさい。

問二 傍線部Bを口語訳しなさい。

問三 傍線部Cに「或有濟乎」とあるが、黄鼎は、どのような手段によれば「成功するかもしれない」と言っているのか。わかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部Dを「大廈」「木」が意味するものを踏まえて口語訳しなさい。

問五 傍線部Eに「遂降」とあるが、黄鼎の妻は、降伏の条件としてどのようなことを提示したのか。わかりやすく説明しなさい。

答案用紙 国語 (教育学部)

※印欄には記入しないこと。

(その二)

受験番号				

受験番号				

問一

②	①

問二

--

問三

--

問四

--

問五

こ
そ
見
え
ざ
り
し
か

問六

記号	名前

問一

※

問二

※

問三

※

問四

※

問五

※

問六

※

答案用紙 国語 (教育学部)

※印欄には記入しないこと。

(その三)

受	験	番	号

受	験	番	号

三

問一

--

問一

※

問二

--

問二

※

問三

--

問三

※

問四

--

問四

※

問五

--

問五

※
